多地子
1706

序

有鄙夫同游名山者其一曰使之在輦轂之側吾開舍其間以司往来之利必不難於得富也其一曰梗梓豫章大可以為棟梁小可以為罇觴者不知其幾千萬而遠不能致之也是未始不欲觀

1706

於山也唯其有見於利也所以亂其思也
傳曰耳目之欲接則損其精凡今稱能
畫者思殆且精敗者從至其心則謂是
足以取大人之游而施名於一時耳夫名
從譽生譽不博乎則名不侈苟要
其博惡得不從流俗所好乎既與流
俗同其好則是流俗也以若所為欲出
於流俗猶却步而求及前人不亦左乎
故其輝然煌然穠〻然翁〻然因
說人目以為奇貨者皆觀於山之類
也宜乎畫史之無風韻也仲子和蓋
進乎技者也其好之不措既已樂之

〻之至則喜怒休戚榮辱好憎曠焉
忘之不少頃于胷中夫如然者又何亂
思損精之有今試使世畫史膠目塞
耳知學斯文亦必無如鄙夫然〻則
子和之精學之所致〻思之至畫之
於詩也同子和又善詩是其所以出乎
衆與此編則其土苴也已純卿性拙於
詩而喜言詩不能畫而好論畫每
見子和等斯二者頗聞其發墨行
筆之意亦久矣世傳子和之畫或有
不必然蓋其為人不能峻拒請者
麕至求之大苛有代為之者云及岩

太初来乞余言。次其所知乎子和。以為之序如此

安永乙未之夏五月

金峩井純卿撰

[illegible]

東江源鱗寫

[illegible]

明治四十二年 七月 日
梅澤精一 氏寄贈

画譚雑肋上

○画

画のハじめハ黄帝の臣史皇さいと云こと世本呂氏春秋等にも出つ
蒙恬ハ始めて筆を作りしと云ふ張彦遠名画記に
出て穆王の伯夷を引て画史多くあるまゝあやまりしと謂す伏羲氏
八卦ハ出て画の初てし太古文字○日月鳥獸草木象
形文にて皆画なれども書画一塗より出たるし端冕衮衣ハ黄帝の製
にて云云十二章の画なるよし黄帝の時より始まりたるなるべし
○人物道釋画ハ漢魏よりも名ある人の稚拙なるすく
画神も上古より及ばず趙宋以降李龍眠の妙絶古人をはぢ
すとなり上古ハ大篆多し考工記に設色の工謂之画と謂名画
桂心采色をなす物象よりかくるもの也ハ古こと也唐より画に吳道玄一変を

呉成呉興人と云 山方中宗色 呉道玄 陳鑑 寫照法
淡彩 山方 白描 細筆 画き色
用めし 山方かゝ 山邦上古 中葉 減筆 墨 楷 草
画く 山方 画人 水墨法
○山水畫 唐以前 李成 均研
法名 人 唐 山水画 工
開中 王維 李思訓 二人 妙 二家
宗 画院二流 思訓 風骨 奇峭 妙
王維 裁構幽深 韻 王維の流 荊浩
巽仝 李成 范寛 李郭眠 王晉卿 董北苑 米元章 父子 董源

久 呂叔明 梅道人 倪雲林 趙子昂 沈石田 文徵明 董其昌 諸
こゝ 文人の画法 思訓の流 夏珪 趙幹 趙白駒 馬遠
戴文進 呉偉 張平山 画師の風 金碧山水
思訓 緑黄 以 金泥 色
法 唐画の精高 風骨 奇峭 如
かゝ 画 画師の弟 画
画と称 画祖 画
院 文士 画 画師の画
○花鳥画 古 名 伝 五代の末 徐熙 黄筌
二人 二流 山水 王李二流 黄筌 墨

[illegible]徐熙が樹[illegible]
[illegible]
[illegible]雅士徐熙の流[illegible]
[illegible]宋一流[illegible]徐熙はほめさる黄徐
画の言葉[illegible]及ひ[illegible]格に入らず奏
[illegible]徐は一生用[illegible]当時の俗眼
こびる画[illegible]崇嚴は志も又[illegible]法をこの一切
[illegible]
生[illegible]
いよ其法劉常は絵[illegible]
[illegible]叶邦[illegible]沒骨仲画と云るし劉常松

殷仲容鍾隆は墨筆にて色を用つつ丘爰徐は一筆にて花の出
画をく陳常僧布白趙孟堅は飛白筆にて雙鉤白描を為
郭思画論も山水を[illegible]は世よたくみをなせる[illegible]
[illegible]双鉤はかこうつしの[illegible]
[illegible]仲画[illegible]
又[illegible]小人物を添
[illegible]山の[illegible]沒骨山と云
又禽[illegible]は雄[illegible]
は[illegible]雄[illegible]画[illegible]徐流[illegible]
徐と黄二人の画を古人評して云黄筌は[illegible]徐熙は
[illegible]徐は南唐の[illegible]人物

なるし俗士の胸中にハ大かたさしもなきまゝ其画をかけはかならずして い
ぬかるし董は孟蜀の画史にて黄筌もかくいひて朝廷賞玩
事のもとへおのづく風流の趣もすくなく画格もいやしきし世人の
さのみことハらくかのみまく自らう川しやそれあり色時泥面頼
の趣なる画大かたにかゝるかきの画甚工にし趣をも画法俗にして
格ないしいやしくしやらんかたしまた其ひとみかの人も多かりし
とハいへる古人も画のやまひを論し俗なるを第一なりしかたく
銭舜挙いふこのおほきに此画を世人つねにいふなるをいましめて
甚ひしともいふ俗筆めけて世人の好むるもあつめぬかなるゆへにし文
山などハ伊孚九の画ハ格高く蘭散此趣をたもとしく清と歎
せるも雅致なる伊ハ蕭散なるにてハあるましけれや又余高船清

いつきても雅画ハいつれとも画法もなからんかとも画成て後ち蔵すと
まて無趣なるあるハ絹かきのそめもやうのおとくに見せるも多し古人も
画なりてのちに墨深すといへる我もそを画のやまひしと云を
○画梅も唐の比よりていさゝかにいひしもの墨梅始祖ハ花光和尚し衡州花
光山に住し禅道識学ともに深きへと方丈の傍に梅を多くうゑ
毎花時ハ牀を移し吟詠をあるも夕月下の疎影をみていしるして
墨梅を画かくしきけみとて其筆点せるハかげろきもなし其後花光梅を
たかんにして揚補之ハ園法として花を一筆にかくゆきつくすし気象ハ補之
妙を得くして此時墨梅名家多人ありしかとも花光補之此二人を宗とす
湯叔雅ハ倒暈とて地をくまとるに花を白かくしむ僧恵洪ハ皁
子膠にて生絹扇面へ画き月夜に燈下に映し宛然たる梅影しるし

[illegible]梅はせまりかゝるのひとたゝ[illegible]云ても本とゝ大事
なる一筆なるべかゝるべし　近時の墨梅こゝろ[illegible]
なるゝ枝もまつまつ多く動動ともかつゝ[illegible]皆俗流し墨梅の白梅の枝ゝ[illegible]端なして画きと
紅梅ハ京姑蘇ハ[illegible]はるゝ[illegible]ふ浙州ハ[illegible]宋晏元
献の詩ゝ若更逢開三二月北人應作杏花看とも[illegible]梅を[illegible]
なりて見たるこゝ

○墨竹ハ宋の文與可ハ[illegible]なる[illegible]の時ゝ[illegible]
ゝ墨竹こゝ[illegible]ハ[illegible]
出せるハ[illegible]東坡も画友なりて与可と一雛者と指ゝ
[illegible]墨画ハ古人も菊[illegible]如ゝ[illegible]法ゝ

かゝる不多く古人も院画ゝ[illegible]
院画も院体を用ゝ画院の趣風ゝ梅竹ハ古ゝ
画竹画梅ハ云ゝ寫竹寫梅ゝ清潔な画人自
身ゝ[illegible]寫ハ[illegible]倪雲林の辟俗の姿ゝ竹梅ハ
画きゝ[illegible]ハ竹樹ゝ[illegible]
ゝて笑ひしハ誠ゝ[illegible]墨画ハ妙解なり

○墨蘭ハ宋ゝて[illegible]任渲ハ[illegible]
ゝ[illegible]ハ[illegible]
なるハ[illegible]ゝ[illegible]

○墨菊ハ[illegible]門名[illegible]
[illegible]ハ[illegible]梅竹菊ハ四品ゝて[illegible]

かちらふし

○葡萄は僧日觀なを得る日觀は画図堂の
梱のことなれば初めて学ぶこと豊
多のくはい笠作は世間にはなはだ
無しと雖画は書と同じ図して出
たるみるべし書てをさしたる

○画馬は唐よりくだりし画の時蘇言と謂る名馬貢献も多く士
大夫も良馬なれば図して伝ふ詩にも多くつくりて小馬を一首
かゝるかゝる韋偃し世方して一首馬は韋を恒として大馬をも
一筆よりかゝる大馬は一筆は難なり李用及は病馬を画く

○画虎も名家多き中は包貴をする鼎とともに狗と画きて孫

代〻そこに業とし世は包家虎とよつる
世方狗の図大竹林或は高山中は高山は
出て狗の毛を當一面は又大林は猫嵐すむ山毛は
鮮きは虎は毛を生ずるゆく大林に入らずとも包貴は狗図
草むら世中いづくらをすうつ画かきしも包貴は又上は鶴を
高かく狗は獨をなる獨は猫を含ふゆく鶴のむを山は
獨るを知てとびまるとこと云又古墓は耳のみこきものを狗
あるは暴虎しと云人を含ふのとそ耳ふくとそ

○龍画は古人も軽鯢の形を如しと賞せるも金文あるは古たる図すて
いつくも二停九似の法も全身を為かくるし陳所翁牧溪は世
昔とのゝ為くるし是すゝ一あるふ図もあきともそこは碎落の筆にて

龍画北斗多よあり又古人の
説に吾きゆしとて画法をも見
頃せるなし周礼春官氏も出
しと云画りかさにあり呉道子鬼神の画未曾有
又さられも怪熊等の鬼神しとゆきい見鬼神りう
如きと正傳古王庭鈺い古
飛昇仙佛そりそりそりそり
○獅子図よ越そりふ越あり
多〳〵むとも窟立本図ふ虎の首熊の爪として黄褐色と
又貘をも獅をも獅子とりふ温邪とさりとよりも
巨日白澤をりの〳〵貘の一名を白沢とも云

唐時の人屏よ貘を画りよりの
りの〳〵白乎も張奴〳〵山て貘を屏よ
乳とりを見り似て五耳とりを
中西蕃より献せ〳〵とも偃曝
乳のよりあり人りすとりを
○雷図旧〳〵ふき作り五元論衡よ
まも見し雷勢け方よも巨時
出りも大雷の時弱首鱗身
○佛法僧多ハ不〳〵原山りもむ
性霊集よ出つ唐土も念佛
を形仏法僧多り似〳〵佛を
明の弘治

鑁の静舩妙称念佛鳥の句あるも
○余さきに東方の禽獣の図を録しけるに都火雀と火
鼠の図を御火雀は宋の順宗の時拘弭国より献せしに火に
入やけざると也なく火鼠は火山にすみ其毛にて火浣布を織ると云
余かつて見し図も亦ありしや信しかたし然とも魏の文帝は火
浣布をもて典論をやきしと云へば曠さまる天地に怪物の生
ぜぬにはきはまりなかるべし
火浣布は火鼠の毛にてあるよし云のみは云中記。齊東野語。綴
耕録なとには樹皮樹根或は火浣草又は石嵓中の綿にて織る
と云り又大紅火浣布あるよし清人の書にも紅色なるは
何にてあるにや此方にも石岩の綿はあれとも二三尺にて広くは
織りがたく又たびたび火に入るれば損すとぞ云は真の火浣にては
なかるべし
○象は西南夷にありて中國には画像にて見れはまはり象とよび
なりしか画にかきしを獅子のやうにも画かくは真を見ぬなるへし此方には
たときに渡りて真図を写得たり又佛書には四牙六牙なるもありと云り
○冠服制度は唐山にても古を知りかたく古画によりて論せしも
ころ冕は典刑も存せり常の服は時々変易ありて二十成人士は冠
庶人は巾とありて上古は冠巾のみにてありしに漢は幘を用ひ冕は
韶儀し漢末は幅巾を雅とす冪䍦は斉隋よりおこる幞頭は
後周よりおこり烏紗帽は隋に盛に後は四脚巾おこなはるる唐には
進徳冠圏頭官楷巾なとあり又三代は襴衫へ秦より紫緋䒷衣

位によりてこの袍色をわかつ帯魚ハ唐より宋におこる履ハ三代ハ木
にて作る屐と云伊尹ハ草にて作る屩と云周ハ麻晋ハ絲にて作る
靴ハ秦より始る二世ハ鳳首を加ふ西晋にハ伏鳩をくはふ古服と
黄白青紫赤黒し絲ハすくなし賤者の服色に出きゆへと云
又袞冕ハ秦にハ除きて用ひず玄衣絳裳一色にせらる漢永平
中古衣図を案し始てひ袞冕に復せしむ
○聖像を文宣王に造るハ唐よりし司寇の像ハ本定られども
今の図ハ漢晋服にて古にあらす顧愷之呉道子王維ホ北圖に
闕里誌にも出つ玄端章甫なる者ハ吾ハ殷人也生于宋ニ服章
甫之冠と殷ハ冠法冠なりし孔叢子ニ子思の先君生れて無髭
眉せすと云よりて呉道子の多髭の図を改そしまするもあり

先聖號文宣王を封し聖裔を継き爵を襲ふ人を文宣公と
よふ宋にいたりて祖無擇奏して文宣と謚して子孫の称すへきに
あらすとしてまたり衍聖公と称せり聖裔ハ世々にたえまい
つきの代々も爵を封し闕里ハ校もろく孔廟へ附せしむる
又明世孔福禧ハ聖裔の画をしるしまつる傳ふ
○僧服ハ笠袈方衣なりし方衣とハ袖左右にかく角にぬかせる
をうくへ下りにして身に引まとひかくるものと是を七條と云へりし祀
製法ハ南海寄帰傳などもこゝ出る多ハ木蘭色黒色青色の三色
廣まいたく武后ハ僧懷義を寵幸し梁国公に封する其時笠孫
鈎廷引出るきれくるし本ゆへ大袖の衣を製し直綴偏衫寛衣
名つけ錦繍をもいえしかりし余僧も出世にかなひつるに渡せり

[illegible]

一角垂髫とて髪をかたちのごとくはしを
迦文仏像は西竺の像をうつせしとぞ
天の時沙彩遠優塡七二五仏像を作りしむ
決勝軍五十人を作らしかの像を
像をあらそうはし作りたる常にいとして斎
の朝つとて生模像又彫仏
して作り崎像をあ重すと旧記
木蘭色は赤色もちひるとぶ
青色はあいくすと多ちの

仏光明を仏身をいたてい光も例たる行仏の光尾のごとく
白毫を順風光とそこ〳〵皆悲しと宣果也光明圓満なる
ごとすと古人いへり吳道子は大元中聖画の光明を一筆にかく
ごとしと云

○地獄変相図は吳道子鄭都の寺壁にかきし愚民殺いとまむ
そしとそこて多獣魚肉の市も赤〳〵やこしとし地獄とそこ地獄
菩薩本願経浄度三昧経正法念仏経閻地獄経はるのあり
とそこてそ吳道子はそれをあつめたるのきし思ふに
多くは高氏のいとしめともそこ〳〵郷酷の吏は国中也刑罰をもて
陥は武也ゆるしとそこやとしく〳〵の事もあり〳〵
俱生神は経説のごとし華厳経は三天一日同生一日同名とそ

よく似たるゆゑ此方にも古代画人の地獄図をゑがきしと
みえ又異人は異人なきにはあらねどもそれにならひしをまた此方にも
なんとなくゑがきぬは思ふ氏因なりきたるをゑがくなるべし

○酔僧図は張僧繇はじめて画がきし法道士は此図にて
僧達をあざける僧達は又閻立本は醜道士図をこしらえてそ
のかへし道士をあざけりを返したりとぞ

唐土にて律によるとも僧とならぬもの多かりせしは魏の黄初の頃より魏氏
西河の時を禁あれば僧達ありやうにて酒のむもこうして酒器を付し
おしてをしを禁せしに事なくてはあらはさぬに酔て舞しくひしこし唐
僧懐素は草書をよくしみつから酔僧図をゑがきしとて宣和画
譜にのせたり董其昌が鴻堂法帖に載たる人ニ送酒不曾語

終日松間挂一壺草聖欲書狂便発真堪画作酔僧図

○唐画に女の足をちひさくゑがく女子ハとけるさまく纏足とて
きぬにてまとひくゝめ小く弓なりたるをくつにはくゆへ弓鞋ともいふ
上古にハなかりし周礼屨人にも女子の屨小なるハなし漢唐にも
なきなり漢雑事秘辛・中華古今注なとにも女足の事ハあれ
ども纏足ハなし南唐の窅娘にはじまるとハ諸説にあり輟耕録
にハ五代以来なりといへり熙寧元豊の前まてハすくなかりし近年これを
なさぬものはぢとし又はあきハ元の時盛んにして人又いふなるものへつらふ
女の手しともく明の高皇后の足大なるを太祖のたはふれに笑ひ給
しことなどはいかにしてもしかりとかや清の康熙年間纏足の禁ありし
ことなく又唐画に纏足を広くゑがくは才女はひたぬひろげさいはし

此ごろ唐土の女子額せなく画るいとけなくなる故かのこと
○襪は足袋かとるきぬし白く絹あるいは青かるべし
襪のよし（いにしへ）ありて韈（くつした）ありてもあるべし歩せしやあるべし襪生涯とも
そくにしきそくも勿論し楊妃の絹襪よ玄宗妃たりしふしも
ゆもうるはよ一る魂祭めて老媼のひろ〳〵書もしき居を男
るの足衣を襪しる女子のいにしへ云
○女子は耳よ環をたひをる図晉唐の画よりなる紀年〳〵居を小
ものるとそくとも莊子よ天子の伯御は耳をきくこと耳をうがつこと
をもそこと云中をるよい法華経のをもふ又杜詩にも環を耳
上古〳〵ものあるもいく〳〵又婦人のゆひよ〳〵環をい戒指と云
○唐山にて人の面をうつすを寫照とも傳神とも寫真とも云人物るよ

妙をなしいにしへ人のうつすいあるとも雖画よい
妙るいやのもて唐人いみつのを星原よこひて宮ををくる三千年
よみそうるいい桂魂ゆらはいるゆ〳〵きく〳〵うつすあるものと偽さいそうや
伊川先生の家少師影帳よ蒼頡福郎像あり一画師九ふ画よ
ちのきのこくるるのよもふく芸郎いい孔せく家人いちのきさいろせけ
いよ先生いい人寿七歳省宮数画のよくするおりるんやと羅じ
画ものあるとも家世雷事よ出たるの
明の王徽（ある武夫）像をなしよ片人左の眼眇し武夫の像るれい石
弓ゆはもちて左の目をぬきもる場画き蓬ゆかてけ色大の狩ひしとそ
○祝寿圖人の年寿を賀する時東方朔西王母寿星或い松又い
梅竹鶴をあのきたるるる寿星い寿をくしまい多きもれてるも

画者もまたかくのごとし是は杉柏を高かく杉柏し送別の音風波
涙をあらそはしめたるなり

○画水は孫位工なりといへども流をかぐることは孫位を高かるべし
しかれども方丈の東福寺の仰板の飛龍主は蟠龍を画しら
いしをもて水は火難をさけんためなるべくなり

常州太平寺仏殿は徐友の画水なるべし兵火をのがれしと又蜀州
柏林寺は呉道子画水あり石剣とかくして火をさけむ此邦
にて鶴多国にてせしとかの所は梁州あり汗血あるべき
水難はあひて又画水のたくはなしとかくいまもなをそ

○張南本は孫位とともに名を弱なるべく孫はよをひかをくなて火難
なるべき妙をいまもなる不動明王の像あり奇異しとかの

画譚雞肋中

○鍾馗は玄宗の夢に虚耗といへる鬼を鍾馗こらせるを呉道子の
画かくしめしきとかたるは人ありしかるに蓋し古来
一大神の椎にて小鬼を打ころす画あるべし齊人はつちを蓋蓋と
云ふ蓋蓋は鍾馗の音同しきなり文人のたはむれに鍾馗
士伯と作ると云ふ宗と呉道子合はせて云ふ也又虚耗とは
貧乏神とかたるなり人多くかたるし云ふる老人貴ふ国にもあり
石恪は酒に耽る人なり画しは宋氏妹婿孫知微石恪ふは
鍾馗の鬼をよくかひ鬼と碁をかこて鬼の脳をとるなり国にあるも
ちまち国中の皆訊て是あるべしとて知るも国私俗なるべ人見あく
ものしけるを此方にては名賢道釋の像をもたかきとなる

ゑかく人あるも輕薄不敬のゆゑいとひにくむべきなり又朱絃
堂は泡瘡なほきもゆるがごとし此方にて画き知やすし匣大王の
類にてなほもかなきるべし
○王昭君は漢の時胡国と和親し胡を奪として宮人王嬙をたまふ
圖し鼻をもうしぼすに毛延壽しるる上を毒ぶかくひくに胡くれ
漢宮をさたひかるしにて漢を明妃曲とてうたひ物せし
昭君を明妃とは晉にて司馬昭の諱をよけてらくのちに世に
ても云るらいせるも昭君は墓は古らく青冢とも今も遠くのそ
ゑは蒼郊ともいふ石崇は某藤氏は墓と高右ともいふ
○李白逸詩圖を大白一生狂逸のゆゑ多くあつめ子昂ゑかけるも傍に
ゑるゆをとるすゑ采石捕月おいるしに采石のゆは太白酒に醉て舟中に
水中の月影をとる図しけるとも死せりとも伝へ梅聖俞は
詩には歸るの月昇仙をとゑる新唐書には醉死のゆるく唐
書には醉死于宣城とも知るも文集の序は族家は水に溺死
公の疾篤ゆるとき枕上に命をうけてかきしるしやはり溺死
死ゆるしとも云
大白は彰明縣青蓮郷にゆる伝て太遠屋とも称をし
○虎溪三笑図は僧惠遠陶淵明陸脩靜とも石格の画に東坡
題して三人皆笑に衣服冠履にて皆有笑態ゑゑし
ゑゆゑ図知大笑とも三人の名とも伝へ三人の名氏今せしは
山谷は白蓮社僧ゆるとも出家ゆゑ遠公と脩靜は同時にあらず
脩靜は遠公に比て後三十年余ゆゑ遠公へ廬山へ

[illegible]ものもサ年よりかくまてそうもし志摩国しきてうもうあつせし
○寒山子ハ唐の時の人豊干禅師ハ台州の人にして初ひろひ拾得ハ
台国清寺の住僧なりとかたりつたへ寒山拾得ハ二人つれたる高く大か
為て虎にのりて住寺にも寒山拾得ハ二人つれたる高く大か
わらひしとも寒山ハ道を論し又拾得ハ道を論し
て地をはらひしとあるも
寒山拾得ともよ詩を作し詩集ハ道をときて書を遺し
○十六羅漢ハ十八人ハ画ハ画師そうく入きしとし又
尺迦涅槃聖像ハ樹像ハ杖錫あるを中尼崇ハ茅屋ハ茅を
くつせるを中師法ハ張陀尼合とて詩をよりて杖錫つき合とを
ものしゆくよ杖錫あり
○雪中芭蕉ハ王維ハ大雪中屋根ハ埋す山も道ハ大雪
青くなるハ雪の法の中ハ芭蕉青き和るし王維
景物ハ雪ハ雪の法の中ハ画しいそら図をつくる家の家鶏
ひらけるも春安図雪ハ王維ハ雪ハ画しほよ相国寺すめて第元景
山真法を買ひ遺中そ范君錫よあきものきうむ
○梁時ハ江陵を望ものの柏堂ハ僧鶴ハ高くて遺舎那仏と孔子
十哲を画く帝ハ仏ものく仏ものく聖像を為て問ひまてよ聖像
まて向未をたのもしと答ハ法問ハ仏法をかたりて天下の
ちをを不殺殺をくふ柏堂ハ聖像やしてやうをしと
呉仲圭ハ梅花道人と号し山水竹画の名人生涯ハ梅をつくり

梅を和尚の墓し給ふ賊兵和尚をひらきころす
僧侶うつうとして死せり云僧録仲圭とも名画し若見も
図一切しいるゆくるやけは明の末にも大徳寺をひらつこの
うつくしを但寺の人もいつり又上古い柩の四方よりとのかく
をうつくしくとくとも為めきこすとし妙きはるも深人の
為めきしとを図てを為めセ路史るも三皇画るの春情る
ととし帝五のけるくらうつくしるや上古の哀冊文も作るもし
○耕織図唐土いつくしい守令の門の画るき民をすめ吏をるもの
こを本をもつくしも宋言宗の信るをて下く新志の沼あるも梅璃い
杭潛地令をてをこの耕織始終を四十餘像るき各詩を録も
都へめをつめて居うの二図を上進しるい学仏あるしとし志図い

浸種くくを登摩をて織図い浴蚕剪帛をて條をつくり詩を録
せくいそいしめし仁宗も宝元の初め延春閣に二図を画かしめらを
しるもあを康熙帝い二図を京りせくしを画冊とをし序を附し
羣臣へをるひくとを
蠶図るい烏斯家図の師像をかるをるを画をるを
すを仏なるきい蚕絲を輪回せ理あるをくし蚕絲を似て
多を多くの仕方へこの像いるをるをも耕織二図を画冊画巻
とをして楼璃の詩を録せるもるを山を女を嫁す時
この図をりをしむ仕方をて源氏いせ百人一首をるくしもをし
そをもゆくを多ををいるくくもを多し元を書画水の似せい唐人い
上をまこいるきるも唐を画をかひ求める人いるを知を眼力をるを

ゝせ其原を正す事〳〵宋南渡の後は曹勲郭大剛の二人也
画院を任〳〵二人ともに学識あさく目力さくるゝも浅く
あやまるを力とし其方にそもる人は浅き味も
なく大らかをつゝみ又画風の好るを尚ける故に
ゆゑなく其画の出よすくるも多く正宋を紀時代なるあや
まりをそもるもあり画人薩摩の僧秋月の画は元
初の秋月と中品の画しと云るを加へ秋月うきは顔輝のゆ
ゝ谷は輝字は秋月し称は元人にて上品画し俗秋月の称は
あゝす又牛画は胡大年と虎は毛松と魚は雪鱗と各を分け
物もそれ〳〵何ゆゑく目きゝしるや毛松は宋人にて物をよ
くして胡大年は明人にて葡萄は物し雪鱗も明人にて仙仏は

たゞ〳〵此三人は牛虎魚の各は物し又是は画人の
画人あきゝ〳〵物にて唐土の画のゆゑを出すてわるゝを正すてく
きゝて古人の画はあとよりみきゝよゆゑをかきつけてつゞらも
ものゆゑ目きて世法はいかゝきゝし
僧秋月は周文の画をきゝし周月し為けくのちは顔輝の体を
多くゝ写し世画法をきゝし字を秋月しかきあらためしも
古人を参ひて二字を用ひしは唐土にもゝ出方
何の藏ゝも師画の名の字をきゝ物のゝをきゝ浮名は浅き
原流の字あゝきゝ字紛ゝゝ原出ゝて君父師をきゝ
名きゝ人の名の字はいかけて用ひるを見ていとみ
ゝるゝゝゝゝゝ平生文も正字をいかけてゝゝ

唐人も画は上中下品妙品能品とさだめ又神品妙品能品とさだめ遠品
神品の上なるをもつて歴代名人此中にも張志和と盧鴻の二人は遠
品はなるべきなりと古人もいへり今の二人学法淵深古雅にして興映
一言尚のこれをさしもとおもやらんぬ今時放縱なる画をもつて拙き
をかくせば傳人に遠品なりともてはやすべし小家のやもんずるも
さいへ劉延義陳道復を元美義比遠品とせしさく称量
不平乃至一つもかく画い家巧をもつて浮ぶ造化を師とせば
おのづからかるもかるる弊をすくべしつまり
○十方画史のいへる大風忌寸男竜し雄略帝の時ふ画化も
武烈帝に画を常に姓を賜ふと云又倭画師とは恐勝ふ姓
をあたへられて紀ひしとそう国史ようの拾芥抄ふ書日録所の

ようなる古を奈良ふ宅間住吉栗田口等の絵所あるもあるべく
仏像ふ画かくと国史ようも絵仏師あるべ
○法隆寺厨子の名匠を巨勢金岡
○法隆寺厨子に上古ようの画をかくべ賛詞
ようなるも梵賛詞ハ小野道風なるべ先達ハ金岡の風をうつし賛詞
ハかなく画像ハ姓名を道風如此書をうつし持明院御家法
かさねてかくべしやう大学寮先聖像ハ唐画の風よて今名匠うつ
せるべ古今著聞集ふ生つ隆ふ風も今名品品かきしハ古典刑を
存ーけんそふ風ーきし姓名ハ今も道風の書をうつ玄宗八
分ふ似て巧妙なるもの
大内書の制ハ唐ふ倣ふかるべ厨子隆ふ厨の法烟閣ふ擬せる
西洋ふ功者を雇ハ雇ふ芸樂ようあるべ光彩ようあるべ

画かゝ[illegible]の[illegible]又家法を孔子周の明堂
四門、壇を堯舜[illegible]周公の[illegible]を[illegible]諸侯
を朝せしむる図をえがひしことあきらかなり上古よりもろかきしるし
後漢の高彪を宋親王の[illegible]金日磾
の母死せる時[illegible]て甘泉宮の画きしるせる婦人を[illegible]か
きしるせり[illegible]

○後唐明帝の清華[illegible]時[illegible]孫信[illegible]命して画
[illegible]図し画[illegible]図[illegible]簿図[illegible]画[illegible]
[illegible]画[illegible]甲楯[illegible]行列を[illegible]
[illegible]画[illegible]又画[illegible]
又画[illegible]

列[illegible]
[illegible]

○[illegible]上古[illegible]則巨勢金岡相見公忠公[illegible]
[illegible]画[illegible]信家[illegible]加法大河内
[illegible]余旧紀[illegible]画[illegible]智澄
[illegible]画[illegible]山東寺[illegible]画[illegible]
慈覚両大師慧心院[illegible]外田雲芳鉄舟一休[illegible]極の諸和
尚日蓮上人[illegible]画[illegible]可翁如拙兆殷[illegible]啓書記周文雪舟
秋月雪村[illegible]
○上方上古画法金岡[illegible]唐[illegible]の法[illegible]細[illegible]人物
道釋[illegible]画の[illegible]北条氏の[illegible]僧法元[illegible]
宋元画法を学ひ[illegible]画[illegible]の法[illegible]如拙[illegible]牧溪[illegible]

法とて周文八五雲よりして数あるも雪舟のとのゝ芸ゝ出て号中
聖の名を画し雪舟八明にして李在（リサイ）なるも李思訓夏珪馬遠等流
にして古法を豪放をよろこびし雪舟八生涯一筆の墨かゝさのこと禅機をよろ
こぶゆゑ唐画（トウガ）にして古法をうゝ雅致ありと古人のゝこゝ書る
ことあるも画法流派をうゝぬ人八雪舟八雪舟眠よりして芸のける
ものと云八大なり八ひとゝし雪舟眠八五雄世流にて文人画法の原の
呉道子と敵とゝ云しゝ呉の画八いよ〳〵峻厳にして雪舟八つゞし
ぬくさ細く小画なりして画師の流をいせぬ人にして雪舟八大画なる
くみし つゝ 売るゆゑ そゝ ゆゑ山水（ヤマミズ）龍紋（ドウモン）
大筆せし雪舟眠ゝ画法なり

化を浴し 伊の藤も右原を法とし画紀をもあ
文人画法をこのゝ尚ゝ多くも多人も相様うゝ真
のゝ〳〵せ〳〵さてゝくゝまるく一珊をもうゝ
○山邦の画を原出して賞せ〳〵しゝ馮永功（ヒョウエイコウ）なる石色山水一傾あ
日本画にて雪思州より似ゝ〳〵し米元章（ベイゲンショウ）ゝ上古ゝ高妙雪
ゆゝかくあ〳〵しゝ思州ゝ唐代の山水画初ゝ比せしゝ大な
ゝくゝしゝゝ郭若虚 鄧椿（トウチン）も高妙の絵を学〳〵中國の名
画も或ゝ不能せゝ云ゝ上古の画人ゝ文雅しゝ
ゝの画ゝ云ゝ以ゝ〳〵ん又傳〳〵多ゝ絵画ゝ異観ゝ
元の時ゝ傳法世変せ〳〵なゝ画ゝ傳ゝあゝ
卑俗ゝ云ゝ唐景（セン）風 耐庵陶の

かゝるの事ハ雪舟ならんと思ふる画のてゝあるに依て蛮器をも傳れと
あるものなるべしとぞ
雪舟ハ明にて学なりしとぞ
とぞ伝ふ明ハ代々ちゝ明ハ代々ちゝ明ハ代々ちゝ
雪舟の画の画ふるうつき清客院御画ハ少なるのあるべ
ざるべきハ雪舟伝ふ人きよいうかもそとおぼしたもかしハ
うきよ元時の画作ハ雪舟なるひしと云ハかゝる業事を外国の
ものゝ学のものゝよりもかゝるあるハ先ハ雪舟
ものゝ画を学するあるもハかゝるとおもふ
○上古云る高國ゝ僧廣百濟國より白加國化する
ものゝ國史ゝ画家時云る高國李寧ハ善画して仁宗
堂ゝゝゝ朝鮮ハ好尚かはゝしゝや 鵬使ハ
画負ハ妙ゝゝゝ画法ハ北苑雲林石田ゝ学ものゝ云ハ
ハ書画ハ書画ハ文題名の上ハ東華ゝ小華
朝鮮人ハ鵬のゝ書画ハ
ゝゝ清ハ唐人ゝ中華ハ
中ハ中華ハ朝鮮ゝ古
ゝ東華ハ
ゝ行ゝ
ゝ文字ハ
ゝ大體ハ
ゝ方の人
ゝ文字ハ書法
ゝ又朝鮮人ハ

寄る商船あり。此一書画詩文をもて序文ふみとなす人あり。
船の一面又は一面里和にしめて国せる人の褒揚を得たりとて
義とす。もとより詩あり。沉帰愚の詩をもて和とす。商船は
國帰なるまいとて詩を通ずるに伝て商船はいろいろ
和詩を作りもちまして乗人をあきもいけるほどあり。
死一文集巻の中に日本国某詩の和をもちゐる
与へ。めしをとりみつ。詩一首作りて詩中あきけつ
絶句せることをのべて高陽のいろいろ
えまて商船の貿利を求る者多かるとも有
へし雅人高士はまれなる人といへ。貴愚の差別も

なくあるべきことなるべし。

○猩々は雲南に生ず。酒と履とをこのみ醉て履をはくときとらるゝ云
朱一説に猩々は海中にあるなり云へる説あり。
又は山海経荀子にいへる西方の国
にて井戸の人と性善なる書にも猩々は北海にいへる説あり。
猩猩児とくるとすもと云ふ。
をあやまりて伝へるなり。清録にいへるは蔡てくるくる云
此方北国の朱鷺にて蔡てくるくる云
能くあいくるも禽獣をはなれる物と云ふ。
○此方にて石公は馬にて唐風冠剣にて蛇のかしらなれてるあり
説に長は竜服にて蛇にかしらなる者にして猩々

同じく家系なりとあるかきあるものもあり

○西湖の圖は方丈にして大船帆舟をもかく西湖いと廣くかもせしめし

漁山舟小漁あるもあるかく画

西湖とは武林恵州潁州の三所にあり今名高く武林の西湖なり

唐時白樂天杭州刺史たりしとき堤を築き西湖

明清変遷を十境と不法を定めぶしたりや又十境とて西湖

めしかの雪鴻は嵩山より かく書き 堤地の十勝を圖したり諸

絵せり一生涯宋迪は潇湘八景を写かく夫より名所今

圖をかく古人はかやうの題名二四同類なりぬ多し 巨江八

景は一生涯なりとこゆ

○飲中八仙圖は崔宗之を李白より高かけるは方丈あり李宗之

滿瀧美少年とは逢つくして老者をもちかしてて孫放せるも

子孫は頭せるを言ふあり

宋時鑑湖慨氏は岩魚をもて賀新郎の歌ひ玄宗

の加恵を紹ひ

○福祿壽は福人祿人壽人の三人を合せ名付けるなり此方にて

かしらを長くして福祿壽と云ふ あるもあるもし 既にかきは壽老人

此三人を三星此圖をも云 也洪範の疇華封祝 視ることかきし

又壽を人は蝙蝠と鹿知らるるもあり福祿壽

の圖とは蝙蝠と福鹿と祿此音通すきこと

○院仲容曝犢鼻褌圖は竹竿は褌帛をかくあるもあるも

今のパンチなり人身兩膝下有完犢鼻と名付

特鼻へとくはうとかうあるを云

○る路屋米も米だにもそハかうこしに米蘆の画をへしふくろの口を
くくりて餉ふくろはくるとちくりうの興栗をはちくるはちくる
似たりけしの如く米蘆なともつて又構花の図六朝の画ハ毒虫かひ
きてのき猫と二人してうたもるかく花時田舎あて米をとつくる似もくと宮林ハ直春と
○陶淵明の琴に絃を画かくるとく絃を画かくるとく絃を画かくるとく絃を
絃をとるとき琴をとかけハ絃と松竹柳菊ハ文絃をとるとかく
菊いるしハ黄色はきゆく黄色と白きはもすく
るかくしるや許棠も人百錦有此自古乃毒詩と作るとく花
絃ハ九華菊ハ白くして洞庭賞せしといへるハ黄色稲りうん又白

菊ハ日本にもとハ范氏菊譜にもとつ凡そ菊を歌ふ詩せしハ桓
武帝の四時ハしめくと旧記にもこゆ菊の古をハ上方にあるしハ
いつかしまりうも
○林和靖を画の翁彼にとかけるハ上方にうるハ林ハ一生つかくて
妻彼にとかくしし双雀をやしなひ孤山に梅多く十誦もうる
うるを梅鶴とうくとかく
隠士の図に鶴あるをして林とこのこと人を画ハ此隠士を
鶴をやしなうるし明の孫太初ハ高名にして友人許九把ハ
米知府にて太初ハ鶴田券と書しにもあるも
○七福人ハ七福即生と云ふとかく大黒恵比須ハ大業已事
代主の二神と云今にくハ天竺の大黒ハ天竺の大黒ハ

食厨柱(タイコクハシラ)にかゝはらず又は土蔵門などにて大黒神を安置し油をそゝ
ぬくひて尊くをたのみをいのるし大黒神梵語にて莫訶歌羅
と云又うちでのつちと云を新羅国旁陀(ホウダ)と云ものゝ山中にて
金の堆(ツイ)をとらえてたからをうち出せしと云ふを続酉陽雑俎に
見えたりをたらせて是かけて向き福の神とあがめ給ふも
明王もあまく知らしは凶兆なるしわざを又布袋和尚を径山
寺の僧にて請儀をみたるも寺をまひ出せしに怪異ありおよび
くせは安穏とを云ゆく寺に鎮守とせらし常人の知る吉を年
もちゆべきものなりし
○渡唐天神の像は林和靖が作りしやうに伝ふと云はずまる事なし
寺中より径山寺に法を問ひ又明の眉仲和尚にて雪舟
画かきしれることは縁ならぬもなかるべし元代薩天錫が詩に天満宮
と題し無常説法顕神通千里飛梅一夜松万事寺の醍醐雲
吐月観音寺裡一声鐘とありて菅公は仏理にも達し給ひしまて
てもありたまへると云雪舟の画に眉仲和尚を賛せしと云ことも
なきにあらねど今は世にてあまり伝へしらぬや
○菅公自筆の像と云画軸あるをも多くみる束帯袍を画くそそ
たしかならぬ上古王者と雲服し四位以上の人王者を重生の
様なりは深世なることそ自像ののこしなきこといふべきは
後世画をあらはして像を画かきあらはし童家解べきなし
の疑ふかくなりぬべし
像を書きたる家々によりて年を造るは童家にてはいまだ温公なり

村学生ハ学ぶを先師とす廬山とても雲中ゆゑ蓋こと
先師ゆゑ立てまつる元ゆゑ孔子を立て学問
をさし給ふ孔子の記録をこそ
ゆゑとて何ゆゑ先師といふるや
○諸葛孔明甲冑せず国せず有孔明ハ白綸巾鶴氅裘にて
高車ゆゑ白羽扇にて指揮一生甲冑をきず城門にて琴
弾ずるも陳寿三国志ゆゑ
孔明を高士とよくよく事実をあらはしたるゆゑ宋章
置ゆゑ古図ゆゑ武みゆゑ白巾ゆゑ白氏ゆゑ孔明を喪してゆゑ
古怪ゆゑ孔明をあらはしたり
○関羽の像廬山ゆゑハ諸葛ゆゑ学問菩薩ゆゑ伏魔大帝ゆゑ

祀せる創ゆゑ三国志のゆゑ目ゆゑ関羽張飛ゆゑ曹我
十郎五郎と江戸の兒女ゆゑ志ゆゑ雲長の図
ゆゑハ法華ゆゑ志ゆゑ
唐熙ゆゑ千昌と云人ゆゑ井中ゆゑ冥民の徳を仰羽
の祖名審字ハ関之子名諡毅字ハ遠ゆゑ羽ゆゑ
ゆゑ碑ゆゑ雲長ハ一生清廉
亭廬ゆゑ封せるゆゑ清廉ハ蜀の祠縣ゆゑ
長ゆゑ清廉亭廬印ゆゑ
ゆゑ雲長小清廉ゆゑ
ゆゑあるゆゑ清人ゆゑ
ゆゑあやゆゑ清ゆゑ

まさる不朽のことハみつからすつるに至る。或ハ後世ハ地名をも
みだりに省し常州を南常と書く常陸をさしていへり
江寧を白鐘と書く白門鐘山を裂きたるなり越郡を楚
越といひ瑯琊を秦ともいふ類にて皆無理にも通せぬなりと
容斎四筆にもいはれたり安州を安陽と称し錦官城を
錦城といふ類を古なりといひならはせり されどもかくのごときに
雅州のみを専らし当時の人にも通せぬ名を紀する紀行
なとにも書きしは後世に伝ゆるともなきにや字義
あらんといふ類し又許平地名の字を欠く聯対をと書せしハ
宋人せしく東坡諸子ハ詩を游戯とせしゆへかかることあらし
唐時の詩人ハ詩を不朽の業としてうたひしゆへ旧名を

なつかしむゆゑなりと云ハ世まで此方なる宋詩をよむ人も蛍雲敵のことし
知るに時に旧名をさしもちゆるハ宋人にならひ又それより後き
聯対にても旧名を用ゐたるを一概にいやしむべし是れた
いふべからずや又官職称謂にはなはだみだりなる多し
范文正公此文に大総運使を部刺史とし知州を太守と
乎和綽にて又ハ服状なれども当時此官なし布文の名無く
おほしあたくハ体をあらたかひをたてんとみえたるをハ范ハ大に
誤ひ印時文字めきしと云ふ多し厳滄浪詩話にも王仲宣
劉公幹諸子此称謂正しからぬを論せる甚的当なりあり世
にうつしられたる画ゆゑあつらへねども少年の書き入るもの
○唐土にても古人の像をあやまり伝へしハ韓退之此像に紗帽

美難なるに韓熙載くしてそ熙載は文達と謚江南の人は韓文
そとよぶ是ゝ韓文とて呼らるとあやまるつゝかゝ退之を
孔廟に從享まつり時も郡縣の熙載像を見しかとも退之は
肥て鬚すくなくして又常熟方塔の青魁菩薩あり赤髮蓋
面にして口は巨蛇を吞くむ是いうゆる張睢陽なるべし張巡は忠憤
を以て自ゝちかひ死して厲鬼となりて賊をうちほろぼすとや
されし厲鬼の像なるべし

○戴文進は秋江漁父圖を八十餘年の朝過よりもちゆるきに
父の朱衣を見たりをそしつるに枯処士某は戴嵩の闘牛を愛めに牧童はうゝくるゝかふ
時を一刃の刀は角をうる尾はあまくのうるゝまきに入へきに尾を

ひけるは闘牛のあるゝはとも笑ひしとゝく又呉の道子の鬼の圖ふ
木鉢をおび五知慎の梁人はるるものを閻立本の五聖君帽
帽をいゝくゝく呉五衍の雞圖は右袵ゝとゝきゝ古人保して宋劍
周の方ゝ梁人は車ゝ方ゝ惟帽は清ゝ始る呉人は左袵しと
云ゝ牧童は頼敏は賞すゝ牧圖の典古ゝくゝきは云ゝ牧童も
画妙を論ゝてはあつゝぬ本ゝまてはゝしめふ知せる世方のあやまり
るゝゝくゝとは閻日比をゝあゝ漁父朱衣は妄なるそゝまく
木劍は南史ゝ出かゝゝ木をて作ゝ彩絵ゝ用ゆる劍ゝ漁父は
ゝとゝて真の劍ゝ誤るゝ武靈王李牧は木の薄剣をゝは
しめゝてゝあきは梁時ゝ必ゝ木ゝゝふゝもあゝゝゝ又古公單父まゝ
胡立馬は隋馬なゝんゝ我友金峨山人云ゝ

画譚雞肋下

○楚石大仏像を胡粉塗に多賀高かくかかりて其石化を社頭
いうせんと思ふあるを姫〻来りて国の祖神也像をとて
ひるまもとゝ買ものめ留られに秋碧を富を行ぎとゝ
楚石に元帝ものこゝろ北狩〻少もてひつしの常ぞうつゝ羊の子
を注ものゝ知をこゝて詩を作〻かゝること高なる話も行きもけるを
来〻〻来ものゝ〻みおひたゝ〻〻くかゝ者もたゝに今もものこゝるる
へものふるこゝる日本人といふ北人ふてはなきこゝや

○毛文昌陸垣朱光普左建等はおほく材堂のをを思ふく材を
入学田家要姫材嘉記神材医材亟此圖あ者子質こゝ
神仏真人こゝ伎蕊倡優こゝも凡そ人の之及ふ思かこゝ

けゝ方蓋川某英一蝶宮川長亀西川祐信の業画祐信おの〻
おこゝ〻きこゝも人百雷生此情態を思ふく亀人の雅飾雅こゝる
けゝ方は石器のゝ〻後を民俗画圖こゝをゆくこゝ上古雅飾か
ものかくこゝ亀山も清人は服飾美貌こゝるこゝ雅意苦報
こゝ思かけを山伝ふは古人物を思かくゆく圖絵雅こゝ光信は意
格こゝるく筆こゝ勧進神翁筆思倍こゝ後世の大和絵こゝ
きこゝも企ものこゝ

○姫人の図いこゝ〻〻い手満こゝ〻〻の郷み荘室こゝ後世こゝ思ほこゝく
こゝかくは劉頂邂赫こゝやこゝ〻を伝ふこゝ云うの方こゝたけもくこゝ思わ
こゝもこゝ町絵図こゝ

町絵は宋画こゝ〻〻多巷逐来の法と者こゝ宋は利のこゝ市中こゝ

利をもとめて画かくものをいふ

○界画は五代にはじまり郭忠恕は儒(スウトウ)呉道玄は界尺(ヒヨウシヤク)を用ゐる

界画は入こみまもる樹石を畫樹ともいふ

○朱子行を画くは東坡詩院まで眞別て墨茶たるし朱子にて

画かきまゝし宋仲温も画きまゝしかるに程堂は朱行を画きし解字

中は雪行秋月は完顔亮は方行を画かく

古人朱紫行を画けるは行をものみ画をよのわるこゝに遠無戈

こゝせる朱行は画ふ延平山中より生て紫行は雷海或ひは蜀山中

より生る方行を呉紘山中武陵桃源あるは生ずる方は蓬萊

とをもふ行を朱崖公の性情を学せて

○墨竹根よりも枝葉まで画かきこの国せいしゆんなるを見るかは

こゝぬは東坡に来え来はしめて地を行ひしより公は竹石知る

かきあるこふ節をもつたぬを弱冠ひしより竹のはしゆんて生ずる者

なるよりこゝをもつてしるべし

○劉松年は東坡世画を学ぶこゝふ人まを好を俗あるこゝふ子

をかのこゝをもつて巨濤震子谷松老者は八字をかける巨濤は

劉涇の字し涇の子に米元章は名の字あ米芾氏し篇きて画

学博士米芾之印は篆字あ刻めて

学ぶ氏の字をこゝゆゝは字をもはして氏をもとゝ芾は名なり

氏のこゝゆゝこゝて芾も字をこのむ人まて知てかく刻さむ

此方画家の印は杜撰なるもこゝ中の字五字とせるは落成

のはしに彫ハ四字とまた私印ハ官印とハちかしかるをハあすきとするも
あきらも大かい姓一字名一字なれハ之の字をくハへて何々之印やと
四字にすへし　姓名にて二字なれハ之の字をくハへて何々印と
四字なるへし　字と号との印にハ之の字をもちゆへし　又字の
印ハあさなハはふくか又ハ字何々と氏の字くハへても剞劂へし　字曰
何々とあるへし　唐人にハなし　字余曰何々と　余の字を加へ
たるハ宋に始る　楼鑰に字余曰靈均とあるもあり　宋元人此
尺牘に墨印落款あり　雲に居て東日乃朱印ハ云ふに安からす
古人敬謹せし心より墨落款せり　此方の古画にも多し　墨印
あるハ雲中にありとて何ぞ皆すへて用ひしにやあらす　雲に
あてまくほとの人ハ敬謹の心あるへきや　しかれハ墨印も用

ゆへさらにハあまた唐人も落款の印記にハ墨印多く見えけれハ
又歙縣の印譜に精良なるものもあるまて莆田の林熊といふもの
周氏所蔵の古画かゆしとて其印記を時揩にも墨をもちゆる古き
かの法あると此方に見え記すのみなるへき
○此方古画の墨蹟に鑑りあるハ京師の紫野大徳寺の什物にて多し
唐土にハ集数に唐時の名跡多く大宝慈寺に今て寺院九
十六殿塔廊堂房廊すへて八千五百余ありとて
○画に手て名を記すことハ一幅の内に畫好の所あるも落款せさるを失
すれハ金扇を拾ひても古人も云ふなり又画をたに花押を署せしハ
徽宗に始りしものもかくのことくにて程史にハ押字ハ晋よりありし
ものといふに唐の文宗の時群臣か奏ハ真草にて名ハ草と

用ひた艸を以て印押とすと雖も時代を形模ハかるべし今の
さくく集りしハ又のちく集古録癸辛雜識あるも立仰ら書帝
王の相の署字あるものハ世ゝ
○趙子昂ハ帰去来辭を嘉興の
乃作所石刻明の嵩山の二小楷を強語を
擅院の図を所を千文を楷琴院
画ゝ
あるハ
あるもの
自題非工石若用古ハ非解不若無題と
書者

桐子に美人をえがく解語花の中富士里杜鵑
枝上月三更より蘇武羊を牧ひて臥したる双鶴をえがく樹上より
子規午月初をえがく皆寸金秀麗なる首選なり
試目こゝ昔生の文やゆゑなるもの鶴目こゝ宋代画よりも元
用の文を法こゝかゝるもの画をもなく元李竹画一軸あり竹
有声画こゝ画こゝ長芳の詩と古こゝ
○高鍾馗。多三教。趙楼。かゝる画人をつくる強拙一国こゝ
蕭楼こゝ多ばかりなり古のくるに長をまゝる僧人も名をよるもかく
名つけ師のまゝし唐人いる門画として一代の動を妙するあるし
此方古門西京ハ鳥羽僧西の人物光琳宗達の艸也眉間毫
珪甫ゆゑのこゝ猩〻鸚也鯉こゝ鶴こゝ達磨古澗の大足神

松毛光の布袋等し色時こゝ梅竹山水おのゝ唐門名をもつくこゝ
○張躁ハ左右ゆゑ弟をもつ樹枝をもつくこゝ王輝ハ左
をもつて画く人こゝ左をもつこゝと戚仲趙廣も左をもこ
山邦左轉の人あゝて若書いたるまゝ竹をもつくこゝ剣工彫工ハ
左某こゝるハ左をこゝ云こゝるや又ハ姓こゝるゝや京師の僧鼎中福田ハ
高孺皮北法親こゝて朱市彫刻ハたゝこゝ左をこゝ向こゝる二三顆を
こゝ用こゝ基精良し
山方こゝてくをばかゝこゝ又をゆゑ墨蹟こゝ云ハ書のこゝ多こゝるをこゝ
さこゝるハあゝ須磨山こゝてハ海某こゝるゝ多ハ墨蹟こゝ云ハ
画こゝるも画ゝこゝて云書籍こゝるもこゝ
○真行草こゝ云ハ書家の名目こゝ画家ハ画格こゝ云こゝて

りあるをいうとみ細巧人物画をいうて色彩の絵をいう人物画をいう
をいはるるをいふ細筆をいいてもをだちをいふ
てくるせる画のまうてあるんだ格絵の新ひとを細巧画はるを
○画は聖賢道釈人物の部戒あるも第一として山水は無彩の墨戒
をるを画家十三科も四分あり生余士女鬼果牛馬鞍鞍園は雅玩を
あるを古人云て書画は家富貴妻妾遊水繁華を園を
鞍園とは一無あるてあるきたどけをる園ををらは俗人の目をは
をづををるををるををるををるををるををるををるををるををるを
人のをて遊をはをるをぬををるを計方あは三四十年若は三四年中
を道釈も用ひをを今は周濂溪先生の園を蓮あるををををを
蓮を虎は毛を行て千里隔ををて蛾要遊をはいをるをををを

虎は百里を走は道ををををふゆく歩をは知をををを傍雅録を
ををを墨ををををををを
○九朽一器をは人物画は器容ををのはをれは筆ををて品を入ら
をゆくを朽ををを用る形ををのををををて活を一たひをすみ筆
用をて画をきををを筆をを形ををををを
朽はやは記をを土器をを廣ををを柳炭をを云を人は石をのをく
を作をを用を絵をををををを傾をを
○書画の装具を第ををは范曄は軸は金銀珠玉はをくて
画を掛を角は濃を用て檀を香をををを麗をを
唐時は宝綾標首紅綾引首珊瑚軸を絵を絵をををを
俞紹は代記孝経を宋の時は画は金絡玉軸標水晶

軸のうしろあれい

はこの方は中ほども桂の時の好みのようなるひしゃくの宋人は唐無うき年代記

うち寸方法荒よりの席流をもうせるは文献通考のも紫をうし又

康熙字典唐字注より日本伝唐無を引けりもあり

○古は豆腐の揚げ揚げは米元章はしめもみ〜かくして人のくるまちいるぬ

為うせるも挂幅の風帯はもと蔓の象をひて紀なりとてけうさん

物れそ白紙を二條たれ立くを蒸をおどせ〜しまゆ唐出そい

磬蒸とうは又屏障より丸角圓面いろ〜うたちうけて張りうを

氷裂碎紋とうも又唐画のすうきのてうきあるて是ものの紀

たりうとうかくそは味し宝軸いふ仮なきは唐時よりてとちてうまうを

せうも書冊の上をはうあるは外函(ケイカン)とうは又まうきうは本は上ぬまうをのせて

よりも古図をは絵様し海棠雪花絵様銘もうきし香盤も凡業は多りを

まうきうの拵物の上をうをし古図をもあり〜杜若もををいう

○蕪をあり〜結をすを画をうは又あり〜あらうあり〜は画弟我物ばで

かうはうをうをは絵をうも切さうをしてさりあるれをさりうもしつ〜又

古画はうをよ孔のをあるうあるれたりうつ〜し五月八月あるは元出(皇)を

かけれをうを画をうは〜画をうは弟我をうけてよう〜は二候をすきりなは

開きてかうを〜古蕪をうをは日はをうをはをうを〜かうきは宿をうく

老紙もやはうをうをうをうをは和らふ巻きはは多〜

○は方をうて藤蕪をも雌黄とうは堂も雌黄は石しすりうて用の雌黄は

雄黄と対せ〜をし雄黄は雞冠石をうを画は雄黄雌黄藤

黄をうは用は又大諸石もは方上古は用ひ〜し山水海浮は熱石も

用ひし燒土は唐土の山水は松樹あるは石黄を用ひたる
又綿臙脂（レンヒンシ）蒼青（ソウセイ）黄青（ワウセイ）は付子（ブシ）の
さうめく　ちくさ絵は画きしは久しくなるて皆色あせ
つまもはなはてとくはなはもあれは繪粉（ヱこ）も德青（ウフウケ）の時にしよりは又
煙媒は付子は用ひたる油烟にて松油にても上へ皿をあはひて
煙をとりこはなるるはなるはなるは和して鳥の黑毛蜘の絲ホ角
綿臙脂は繪ふ指蒙は梗本（キヤウホン）せんしたるの汁をとりふ
ふくして作るとは天鵝絨（ビロウド）は蘇脂とは討は蒼黛（ソウタイ）にて
蒼ようを作らしむ燕国（エンこく）より出るゆくかくようにて又蒼黄は蒼
黄の葉（スイ）にてつくるとは此二ふは何物なるは知らしし但は付邪
にて作きる繪絹は有るは紙なるは紙なるは

○画は刷毛をもちて唐人はよはしし桃笙（とうしやう）にて画絹をあく
ぬるは桃笙をはしもむるゆくはけをかく
用ひたるは中ちと附せる文をは紙画も蛍紙（ホタル）
をもちる紙と唐六典にあり　嘉紙匠は歩紙匠とは又川麻紙
黄色は漆なるは紙和紙は心なは黄色なるは白麻とは
紙心堂紙も有る浸しは絹硯にして柔なるとは今の毛紙とは
さうなると今は毛紙は好なるは紙にて高きにてよろしは朝鮮もふくさ
紙は画はきはしは絹は雲母の後生絹は高き
高麗の紙を画はは高麗は章孝標画角風は雨滴臙山鮮
風吹絹海秋はは山方中書はは高くは高は松は

とくに南画より出て日本人の絵色を用ゆる甚だ拙しとそしれるも
かゝる画法なる事なし
○古人も紙画さいしきとしさかみまでは墨気ひとつとして古雅なるし
絹もまた墨路なくにしむもの兒角をつきくびれ水にひたし
当てらはすと我なて紙へ引きかゝかし明礬を滴らしたて之を
上へ引きかさねてあつけは墨色ひかるべし　又墨へ茶を入れて
製し墨色或は秦皮を水にひたし墨摺するとして色なき
色なきにしたはぬ法あれとも用ゆべからず　紙墨画
にはしたて紙にあつきまゝは阜角亜米にてよろしきもし
○さつきすら死して見えぬ人をも魂をもちへ讀うつし　像我見
かき又畫圖も見るの不知之入々又或はかゝるとあしき庭上の群

鳥およびその御像より光り輝きたる舎利を出せしと画記にも
似像にもこの皆画妙なりは邪術のたぐひなるべし　又鏡の
面に佛像あらはれしといふもみなきこえども其の画のきゝえぬ業法にて
古今医説にもいへり
明の万暦中小利瑪竇といふ者西洋十万里を渡りてきたりて天主
教十字架とこれをおこたり君民の心をみだりしてこゝに衛畫も
並らびに唐語をよし　範天圓說尾車遠鏡候鏡天琴なんの
書籍時いしたる擔摩しと云　又利瑪竇が著せる天主実義交友論なんど
書ありと云
○生うつしは初めたるはなし　去る正徳五百羅漢寺なとの
ある二幀のことき今は加の地にも見られずと云　油にて絵色を和し

紙にハ書たる次緞布に画かくゆへ唐土にては蝋緞画とよぶ尉遅乙
僧ハ唐時の竺法画師也遠く望めハ画せ肉よりうるゝ開ありてみゆると
いふ又竺画にハ人物より五彩をあらき身に金身をあらはしてみゆる
日に映じて陰然としてほゝわくと見ゆるも有となり
○加賀のそめ画ハさらにおもしろくハ圓柱佳なるをすくなし唐土
にハ漆画いふものもあり綺繍刺繍克絲等ハ説苑諸書にも出づ此
方にも目かけもの画をおりて姻も上古ハ中将姫のまんだら繍
繍せたくとかゝる
○漆果南楚才ハ妻薛媛ハ楚才旅游してかへらさりしかハ
自ら容貌をうつさし欲下丹青手先拈宝鏡端已経顔索莫漸
覚鬢凋残涙眼描将易愁腸寫出難恐君渾忘却時展

画図看と題してよみおくられし楚才是をみて志を風流情義
纏綿をかんじやうて帰りてあひともなひしとぞ又河中倡女崔徽ハ裴
敬中か使となりて蒲中にゆきしときあひて相たのしみけり敬中
かへりて後徽しのぶ崔ハ志をうしなひ終に帰る道もなくなりを終しと
病にふし自ら自の写し崔一旦不及巻中人矣と言てよせ
後しに
叶方五車師ハ好くむかしのゑかくまとはく自ら画を火
焔の中にゑがき歌一首をかく君ありてもひしやくとぎハ
模様画のすかたを有なる顔楼圓なるハいくらも伝ふるなし
ある王樨登ハ仇英ハ女せ画すを賛し繍して律之女行厥
亦牝鶏之晨といふためしあたりて書経に牝鶏ハ先立て何したら

法こそ云つけめも共中儲を法こそ
さとし給ふ事を学ぶ人とすべきに
詩歌連歌書画にも学ぶべし風流とは
云ふべきなり男子も女子もこうまとこそ
さる由婉娩雅淡の言葉なり女性もいとも
楊雄記に公宮夫人の竹石差よ吾竹房は好婦子
なり云々是ハ物しやうやう云ふ事なり昔ゆえ女の
身にてかゝる画をも好ませ給ふのみならず
つくしかくしたる事なんと云りれしとし
○圓悟を移本にてうつし侍るハむ随便省工と
てあつさかきにも古人も云つけ竹方の画半紙

論しへたるもの　拙序五上略　輓近世有撰幽齋者其画衣鉢周
文雪村間用峻廣筆蓋喜陳子和張平山所為也務造潛沼
圖様自為一家観其所以導後進亦以模倣之様為学且禁
出新意是其俾人率由之奉以為金科玉條則未免有弊矣
如椎魯不可学者專以此為号則其究亦乎擬様画胡盧虎
鵠之類狗鶩猶且不自知之扼腕而自謂可以列作者之林
溢之者皆是嗚呼撰函之亟恵於后其誤人而不尠矣云し
○宋成道の画ものして石に刻めるも妙し是を墨画を縮めて
刻こしを真画とせくるとうしかして義安道の画ものして又仏像を
描くを如し除澤の四帝ハ玉坐をうしかして佛像をもむ
古像ハ朴陋なりしかも安道ハ威儀をまさうんためる藻飾を

多くハへしらしく又楊恵之ハ善画にて塑像をも好みせし故にハ
塑画をも翻塑して作りしやと云郭熙ハやうこ新意を出こし
壁に泥を凸凹にたゝきつけかわきたるに随ひ山水を描
筆をなし、さいしきを加へしやうし是を影塑と云へり
塑の法ハ土にて佛像を作るに絹をきせ織にてもく
かためうるしにて縫目を模をくゝりのちに土をぬきさるなりを
搏換と云
○陳の楊子華ハ世祖の寵姫くしらくみえ好みを
なくてハ画くを紙ゆるされ宋の郭槐ハ徽宗に身ありし事
其ひちを封しつくりしてなをしあるに随ゆくに二事の画崇時の
人をとめえさうしとし又李生鄭所南王梭文徴明諸子ハ言

分かして権勢財力ある人のもとめにハ忌られ文雅の友にハ
画かきあたへけるとぞ浮世ハあるひハみつから筆をとめたる故
なるべし　権貴豪富の所ハ先画を得べし
○画学のことハ古人の論に大人画士ハ一家にかゝはらず諸
名家のもちゆる所をならはせてあつめてみつから家をなせと
一家の法則のミをまもりて学ひてハたゞ一家の画に似て似ざる
病ひとなり今も画師の家の画に似するを似かんの家ハ画
法則をなしゆゑみこと云もなかれ有りても一家のみ画ならず
俗のみ其画法のことをはじめ学ひ古名手のよきを所を作ぎ
もとむる心なきよろしき事ならひ小紀し古き所ハ目に
見るめのよも古名手の跡をとてうちから流をて合点ゆかぬ

物しなりと云てうちやまつるるこのいつれも同しく一家法の落
入とぞやるもあり〜古人も画ハ古之筆なるゆ古之をるきハたくて
なるも皆ゆ〜やいつれ古名まゆ用を法け学ふすして古之を
あるつき拙るゆみさゆ〜よ古之学ふと云ハ元ちく甚〜きハ俗也
家のおしゆる七十二点例ハとき我こうらく学法俗拙ちゆ
云〜いるるいよ〜拙屋(セツオク)なる革つひをして古ちゆ法と云
画ハ革韻ハ潤心ふりと法くとと云るかる掬泥(キクデイ)るるゆて
向上の道と法へけんやそゆ画法ハ学ひ法ふと俗(ゾクヒン)
するしゆ古人画論ハ旨ゆも解せて其上け方ハあるる
細事俗拙ゆと拙む風ゆ唐人ハけるるやゆと思ひ
云出せるとゆ又書ゆも遠きふ行ゆふハ画ハ俗ゆて

遠ゆ有ゆ古人云て宋の趙大くまハ画ハたくし其人宗室ゆ
造くいつるとなく山濤ゆ朝する家道すゆハ宋のゆ又
書ゆるくよ面ぬゆく俗家ゆ遠ゆ不行万里道不
讀万巻書して画祖とるるとハかるとゆ明ハ唐寅ゆ
周臣ゆ画ゆ学ふ画格ハ周臣ゆ高〜胸中ゆ邪千巻ハ
出あるゆしゆ宋ハ鄭剛中ハ唐の鄭虔と閻立本と俗
〜て云二人同〜く名画し鄭虔ハ学方云く流傷と列て
画も無到て物象胷中ゆ有ゆ元ゆ写て立本ハ幼ゆ名ゆ
たゆ〜ゆ学ハきゆ元ゆ花鳥ゆ名ゆ〜ゆ章ハ花鳥ゆ名ゆ〜ゆ身重位ゆ
立ゆ〜ゆ画ゆと同〜く拙ゆを敬て画ゆ〜ゆ俗ゆ住ゆすゆれ
〜ゆ云ゆ古人ハ其為人多文雖有不曉画者寡矣其為

人無文雖有能畫者寡矣しかるに文学ある者無きして画く
雅と俗のあるこゝろ我ならずみ欲除画之俗筆多讀書
宏達胸襟とゝ書をよりまなぶ胸中塵埃ふるゝ圖和ゆる
尚たゝ法とゝ書をよりまなぶ胸中塵埃ふるゝ圖和ゆる
業咕嘩ゆ餘暇時ゝ冊書ふ從事せんも忘れ難
よ落さゝんかゝ

高陽先生著

門人　岩盧和抄錄

畫像贊附大序

家姪幼好畫。索居亦邇矣時ゝ求粉本而已。余嘗讀畫紀。抄騰為譜積為巨冊。蓋寄興。以誘其進乎技者云。曰著岩太初得藁本而喜ゝ。就抄其便於學者數十條。謀上之木。余曰止矣。夫畫之訓用在運神。豈宜言所能盡。且淺

狹而及。六畫家常談耳。曷足流
傳。但直筆獨斷。間在時好。迺是家
庭敎言海也。恐引世君子之譏議。不若山
之爲勝。固請若數次。遂與焉。岩生亦
豈雖助視之耶
之未之奏　高陽山人仲逢沖

文化第二辛巳歳次乙丑仲秋每夜〻
讀之為胸中記遂如若不覚成冊
是於山水堂一窓短簷之下云云人蓬
蒿斎藤以陳

弁之佐